

I 中東イスラエルへ飛ぶ



「国内に入れば、安全ですよ」

教えを乞うた在日イスラエル大使館員は、太鼓判をおした。1986年8月27日、中東戦争の最中に私たちは、スイス航空で安全ルートのチューリッヒからイスラエルへ飛んだ。

私、須賀昭一教授、小倉英夫助教授は、無事、厳重な入国チェックを通る。荷物カウンターへ歩くと、「ようこそ、いらっしゃいました」と、日本語の横看板が目についた。ああ、もう安心と胸をなでおろす。

ところが、前後の降客が妙に足早になっていく。係員が、早く早くと急かしはじめる。突然、「退避！退避！」と叫ぶ声。人波は潮が引くように室の片隅に雪崩れ、壁際に弓型に張りついた。私は第二次大戦の空襲の体験があるので、爆弾が落ちてくる！と人混みの中に立ち竦んだ。

しばらくして係員が、大丈夫、大丈夫と事もなげに両手をふった。バゲージに、爆発物らしきものが

あったらしい。青ざめた私たちをみて、金髪の肥った伯母さんが慰めの言葉をかけた。「こんなことは、いつもあることじゃないのよ」

私は内心、ウソだ！と思った。人々のすばやい退避は、どうみても慣れた動き方だった。ここは、赤軍派の岡本公三が無差別に機関銃を乱射したテルアビブ空港だった。「誰にも話さないことにしましょう」気兼ねした須賀教授が、私と小倉助教授に念をおした。「三人だけの秘密ですよ」私たちは、黙って合槌をうった。もう時効だから、亡き須賀先生は許してくださるだろう。

「姉妹校調印のために、日本から来てくださったのですか」バドリ・アザツ歯学部長は、ヘブライ大学を訪れた私の手を固く握りしめた。彼は、涙ぐんでいた。私は握りかえしながら、国際交流というのは命懸けだ、と実感した。

写真は、次期歯学部長、今も親しいアディ・ガーフンケル邸の夕宴。左3人目、アザツ歯学部長。

Ⅱ タイ国王から名誉博士号



タイでの一枚の写真といえば、バンコクの姉妹校マヒドン大学における名誉博士号の授与式である。

1996年7月4日、私たちは午前中に同大学の大講堂に集められた。同じく博士号をうける他学部の数名と一緒に、壇上で学位記授与の予行演習をした。それは、授与する人がプミポン国王であったからだ。

タイでは、大学卒業者たちに卒業証書を授けるのは国王である。国王のスケジュール次第なので、卒業式は全国各地で一年にわたって举行される。国王から直々に卒業証書をいただくのが、タイのエリートたちの人生最良の日であった。

国王は壇上の玉座に座し、その脇に国王まで順に証書を渡す係が3名並ぶ。壇上の端に組んだ台の上に、三人のカメラマンが構えている。国王は身じろぎもせずに、次々と卒業生に証書を手渡す。片手を僅かに動かすだけである。その瞬間、固定したカメラのシャッターが切られる。その写真は、卒業生たちの一生の宝となる。この日、国王はナント2千名

に手渡した。

私を推薦したソムサック・ザックパイウォン歯学部長（のち文部副大臣）たちから、「あなたはラッキー！」と口々に言われた。高齢のため国王が卒業証書を授与するのは今年限りなので、私は、国王から学位記をうける最後の一人になるというのだ。噂どおり、プミポン国王は国民的人気のある御方と知った。

歯学部のカラーである紫色のガウンを着せられて、ごちない私。大の仲好しの副歯学部長ワンナ・スシャトウが、優しく私の曲ったネクタイを直してくれた。

それから私たちは、出入りを禁止された会場内に2時間余り待たされる。色違いのガウン姿のアメリカ人の夫妻が、不貞腐れて長椅子に長々と寝そべってしまった。私と小倉助教授は、キチンと座って開式を待った。

写真は、国王より学位記をうける私。